

兩者を對比して見ると、斷片に見える處が此の話の一節であることは疑ないが、言ひ表はし方は大に異つて居る。殊に第二行に「イソップかく云へり」と記して、羊の鳴かざる所以をイソップが説明することになつて居るのは、著しく目立つ相違である。表面の文句は現存譬喩談の何れに比すべきか、今考へ得ない。著者はたゞ参照として前記の書名と頁とを擧げて居る丈けであるが、まさか此の表面の文句も、裏面のと同一の話の中に存するといふのではあるまい。すべて此等の點は博雅の君子の教に俟つことにする。

著者が何故に此の譬喩談の斷片を、摩尼教關係の文書中に收めて出版したかについては、自分の知り得る所を茲に附記して置く必要があらうと思ふ。著者は元來古代東西文明相互の傳播融合の上に於て、シクレチズムス混成教たる摩尼教の働を重く見る人であつて、かの基督教國に於て、普通 *Joasaph and Barlaam* と稱せらるゝ佛陀傳説の如きも、之を西方に傳へたものは基督教徒ではなくして、摩尼教徒であると見ること、ヘレニスタツシユミューラー氏等と同様である (*Sitzungsberichte d. Berl. Akad. d. Wiss 1909. S. 1205* 參看)。それで此の書の前序にも、印度の佛教の傳説を西方に、ヘレニスタツシユメソポタミヤや、イランの思想を極東に齎したものは、東方の基督教ではなくして摩尼教であつたと記し、かゝる見解の下に、此の小斷片が吐魯番に於る摩尼教徒なるウイグル人の間に、イソップ物語の存在したことを示すのは、何等驚くに當らぬと見たもので、従つて此の斷片を本書中に收めたものに外ならぬと思はれる。基督教の宣傳の爲に、遠く絶東の島帝國に來朝した教父達が、同じ譬喩談を所謂文祿本に傳へたのが、今日興味深き研究の對象として珍重せらるゝのに思ひ較べて、興味は津々として盡きぬ。